

木星型惑星大気の縞状構造について

竹広 真一

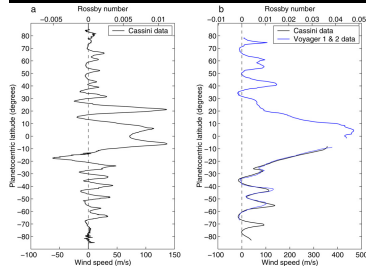
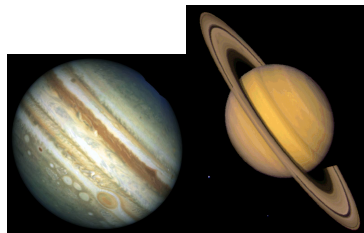
京都大学数理解析研究所

2015 年 3 月 6 日

惑星大気研究会 2015 早春@東京大学

木星, 土星の表層の帯状流

- 赤道域
 - 幅の広い西風 (赤道加速)
- 中高緯度:
 - 縞状パターンに対応した幅の狭い東西流

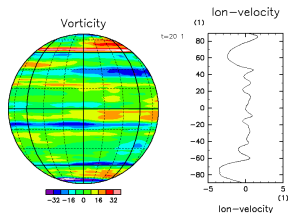


(Sukoriansky et.al, 2002)

「深い」モデルと「浅い」モデル

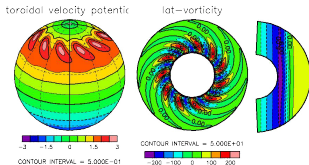
● 「浅い」モデル:

- 回転球面 2 次元強制乱流
- 回転球面多層モデル
 - 惑星表層内の (ほぼ) 2 次元の流体運動
 - 静水圧近似, コリオリ力水平成分のみ
 - ○ : 中高緯度の縞状構造
 - × : 赤道域のジェット



● 「深い」モデル:

- 回転球殻対流モデル
 - 流体層全体の運動
 - 非静水圧, コリオリ力を全て計算
 - ○ : 自転が速い $\Rightarrow$ 赤道加速
 - × : 中高緯度の縞状構造



深いモデル

回転球殻対流問題

回転球殻対流問題～定式化

- 運動方程式 (速度の時間変化)

$$\frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \mathbf{u} + 2\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{u} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \alpha g T \mathbf{r} + \nu \nabla^2 \mathbf{u},$$

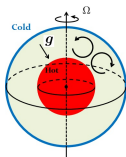
- 熱の式 (温度の時間変化)

$$\frac{\partial T}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla T = \kappa \nabla^2 T + Q,$$

- 質量保存の式

$$\nabla \cdot \mathbf{u} = 0.$$

t : 時間, $\mathbf{u}$: 速度, T : 温度, ρ : 密度, p : 圧力 $\boldsymbol{\Omega}$: 自転角速度,
 α : 熱膨張率, g : 重力加速度 ν : 粘性率, κ : 熱拡散率, Q : 内部熱源



テ일러・プラウドマンの定理

- 回転が非常に大きい状況 (地衡流バランス)

$$\frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \mathbf{u} + 2\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{u} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \alpha g T \mathbf{r} + \nu \nabla^2 \mathbf{u},$$

- rotation を作用させると (密度一定なので)

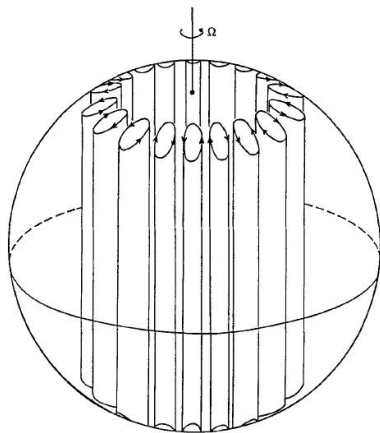
テ일러・プラウドマンの定理

$$(2\boldsymbol{\Omega} \cdot \nabla) \mathbf{u} = 0.$$

流れは回転軸方向に一様

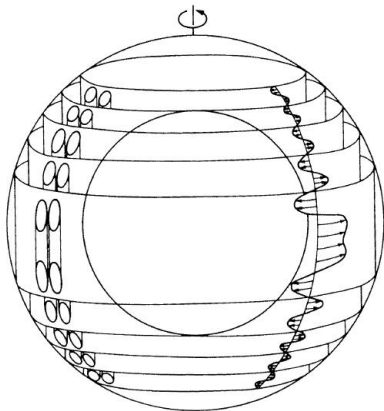
回転球殻内の臨界熱対流

- Busse (1970)
 - 高速回転する球
 - 回転軸方向に一様な運動場を仮定、摂動計算 (テイラー・プラウドマンの定理)
 - 球の中程に対流渦が局所的に発生
 - 対流セルは prograde 方向に伝播

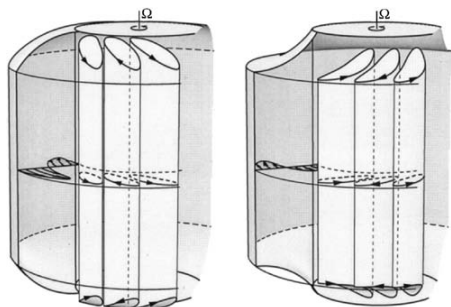


回転球殻対流での縞状構造形成

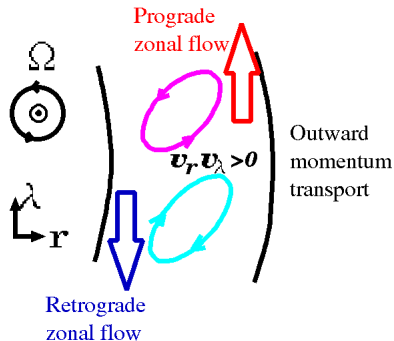
- Busse(1976,1983)
 - レイリー数大
 - ⇒ 対流渦が動径方向に多数並ぶ
 - ⇒ 縞状パターン形成
 - 平均帯状流生成
 - 外側球面の曲率
 - ⇒ 対流セルの傾き
 - ⇒ 動径方向へ運動量輸送



平均帯状流生成メカニズム



(Busse, 2002)

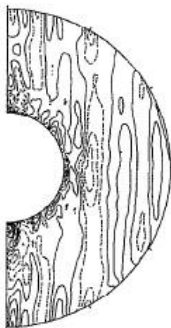


- 外側境界の曲率 $\Rightarrow$ 対流渦の傾き $\Rightarrow$ 内から外への運動量輸送 $\Rightarrow$ 帯状流生成

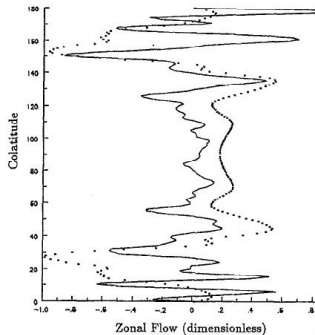
シマシマができた?



動径速度の赤道面分布



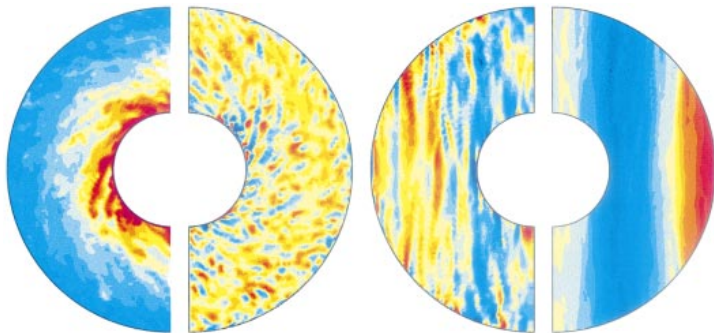
平均帯状流分布



表面帯状流分布

- Sun and Schubert (1995)
 - 高解像度・高レイリー数・低エクマン数での有限振幅対流の時間発展数値計算
 - 縞状パターンの形成?

シマシマは消えた



赤道面温度場

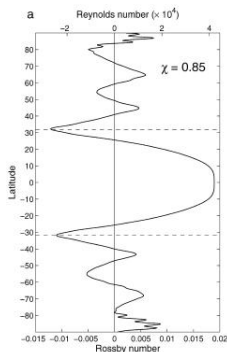
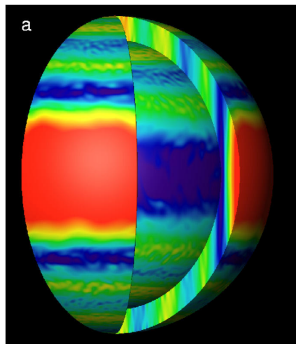
回転軸方向渦度 (赤道面, 子午面)

平均帯状流

- Christensen (2002)
 - 系統だった高レイリー数対流の有限振幅計算
 - 縞状パターンは生成されない.
 - Sun and Schubert (1995) の縞状パターンは偽り. 初期場が残っただけ.
 - 赤道で回転と同方向 (赤道加速状態)

薄くするとシマシマできる？

- Heimpel and Aurnou (2007)
 - 薄い球殻
 - 1/8 セクター計算
 - 超粘性の計算
 - 低エクマン数・高レイリー数計算

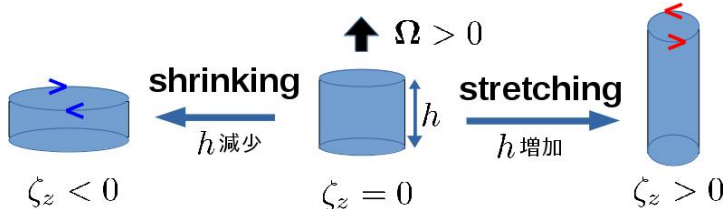


帯状流分布

- 赤道付近:強い東風 (赤道加速) $\Leftarrow$ レイノルズ応力による運動量輸送
- 中高緯度:縞状パターンの形成 $\Leftarrow$ 2 次元 β 面乱流 + ラインズ効果?

ポテンシャル渦度保存則

- ポテンシャル渦度保存 ~ 局所的な角運動量保存



ポテンシャル渦度保存則

$$\left(\frac{\partial}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \right) q = 0, \quad q = \frac{2\Omega + \zeta_z}{h}.$$

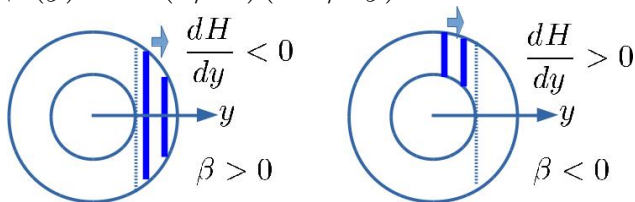
2次元 β 面乱流問題

- ベータ面モデル (ポテンシャル渦度保存則)

$$\frac{\partial}{\partial t} \nabla^2 \psi + J(\psi, \nabla^2 \psi) + \beta(y) \frac{\partial \psi}{\partial x} = F - D.$$

- 回転球殻内の2次元流 ~ 地形性 β 効果 :

$$\beta(y) = -(1/H)(dH/dy)$$

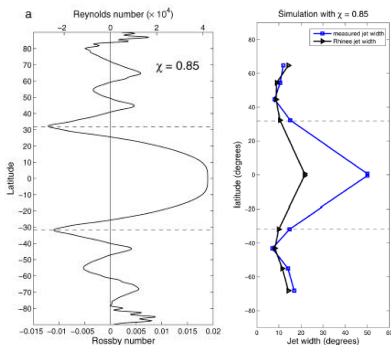


- cf. 回転球面 2次元流 ~ 惑星ベータ効果

$$\beta = (df/dy) = (2\Omega/a) \cos \varphi$$

高緯度縞状構造の説明

- Heimpel and Aurnou (2007)
 - 高緯度: 回転系の熱対流 $\Rightarrow$ 2次元的な小スケールの渦生成 $\Rightarrow$ 逆カスケード $\Rightarrow$ ラインズ効果で帯状構造



ラインズスケールとジェット幅の比較

ここで疑問...

- Heimpel and Aurnou (2007) は高緯度シマシマを2次元 β 面強制乱流の結果だと解釈している
- しかしわれわれは Obuse et al. (2010) を知っている.
長時間積分するとシマシマは消える
- Heimpel and Aurnou (2007) の計算も, 長時間積分すればシマシマは消えるんでないの?

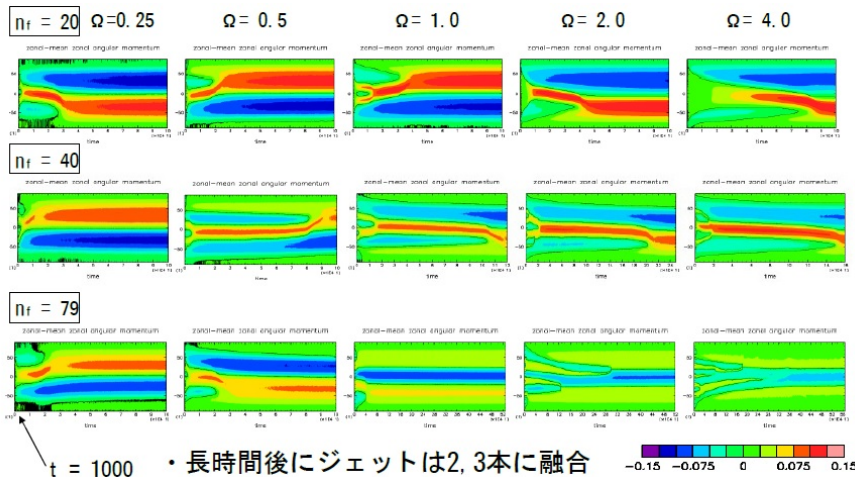
そこで...

薄い球殻対流計算をもっと長くやってみよう.
1/8 セクターはやめよう. 全球計算.

(共同研究者: 佐々木洋平, 石岡圭一, 中島健介, 林祥介)

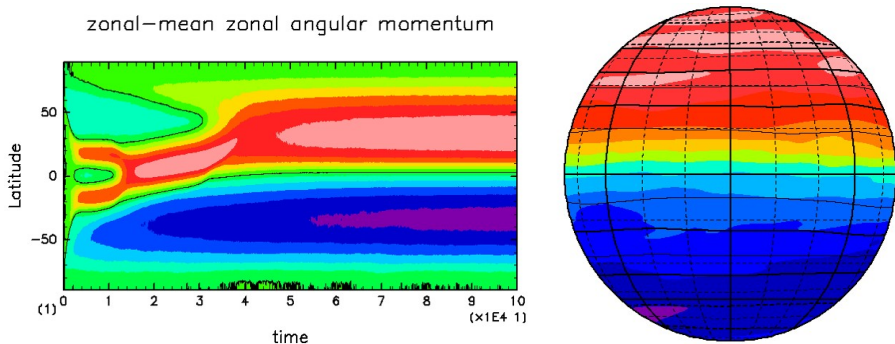
回転球面 2 次元強制乱流問題

- Obuse et al.(2010) : 従来の研究よりも長時間積分すると...



回転球面 2 次元強制乱流問題

- Obuse et al. (2010)
 - ジェットの融合・消滅 $\Rightarrow$ シマシマが消える！



角運動量の緯度分布時間変化 (左) と帯状流分布最終状態 (右) (Obuse et al. 2010)

全球長時間積分

- 全球計算 $\Leftrightarrow$ HA2007 は 1/8 セクター計算
- 長時間計算 (現状 12800 回転 = 0.2 粘性拡散時間)
 $\Leftrightarrow$ HA2007 は 1600 回転 = 0.024 粘性拡散時間)
- パラメータ設定
 - プランドル数: $Pr = \frac{\nu}{\kappa} = 0.1$
 - 修正レイリー数: $Ra^* = \frac{\alpha g_o \Delta T}{\Omega^2 D} = 0.05$
 - エクマン数: $Ek = \frac{\nu}{\Omega D^2} = 3 \times 10^{-6}$
 - 球殻の内径外径比: $\eta = \frac{r_i}{r_o} = 0.85$
- 境界条件: 応力無し条件, 温度固定

数値解法

- 空間微分: スペクトル法

- 速度をトロイダル・ポロイダルポテンシャルで表現
- 水平方向は球面調和関数, 動径方向はチェビシェフ多項式で展開
- 切断波数: 水平 341, 鉛直 48 (格子点数: 経度 1024, 緯度 512, 鉛直 65)

- 時間積分:

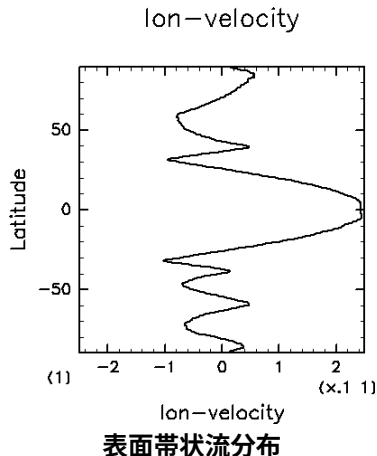
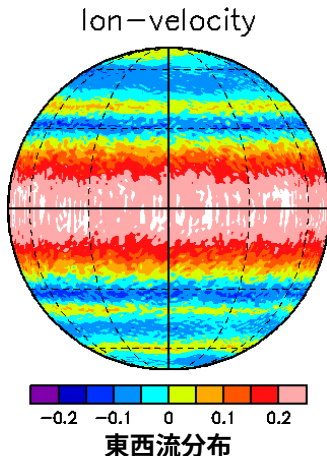
- 拡散項は Crank-Nicolson 法, それ以外は 2 次の Adams-Bashforth 法
- 次式の超粘性を使用

$$\nu = \begin{cases} \nu_0, & \text{for } l \leq l_0, \\ \nu[1 + \varepsilon(l - l_0)^2], & \text{for } l > l_0. \end{cases}$$

- 本研究: $l_0 = 21, 42, 85, 170$, $\varepsilon = 10^{-2}$. (段階的に超粘性の波数を大きくした)

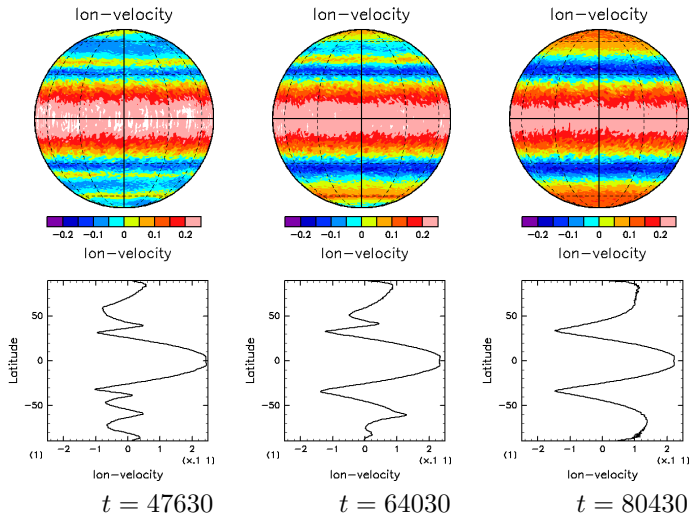
全球長時間積分

- $t = 47630$ でのスナップショット
 - 中高緯度でシマシマ形成



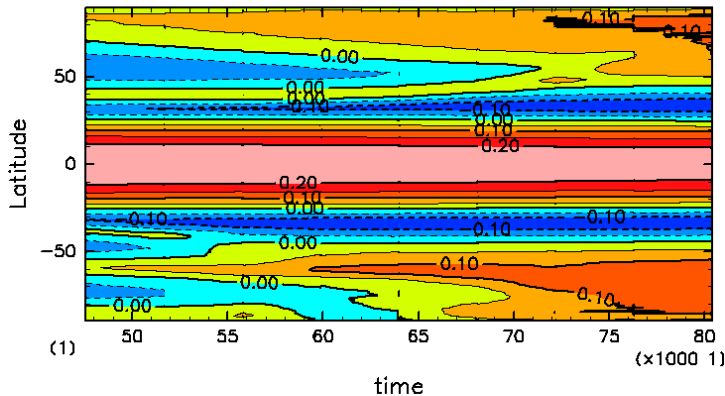
全球長時間積分

- もっと積分時間を延ばすと...
 - 次第に中高緯度のシマシマの数が減っていく

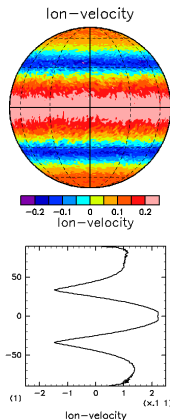


やっぱりシマシマは消えた!

lon-velocity

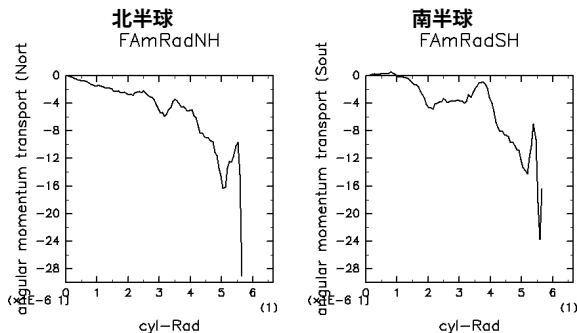


帯状平均角運動量の時間変化と最終状態の東西流分布



角運動量輸送

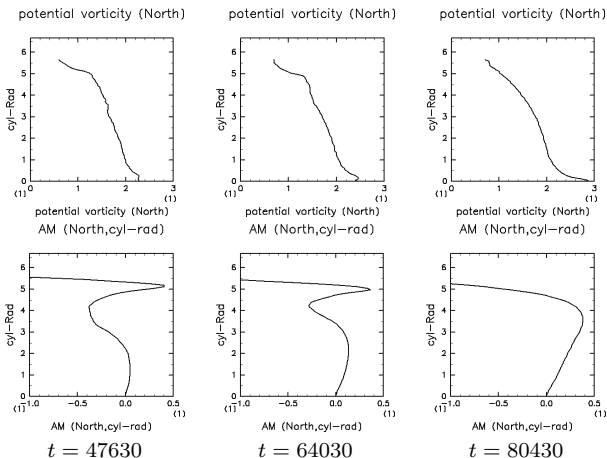
- 東西・回転軸方向平均角運動量輸送



- 負の角運動量外側へ輸送 $\Rightarrow$ ロスビー波の外側伝播 $\Rightarrow$ 中高緯度を加速, 接円筒附近を減速

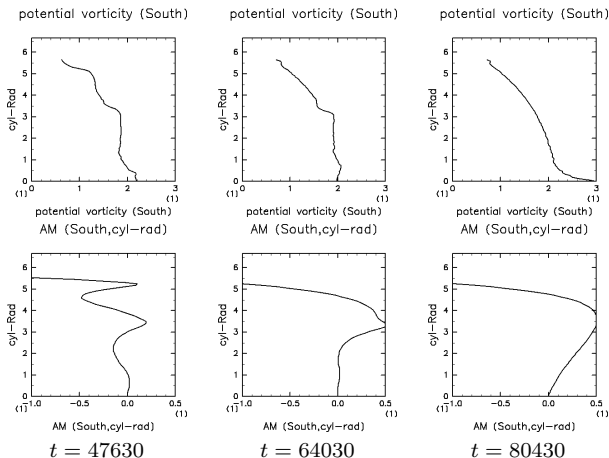
ポテンシャル渦度と角運動量

- 東西・回転軸方向平均ポテンシャル渦度(上)と角運動量(下), 北半球



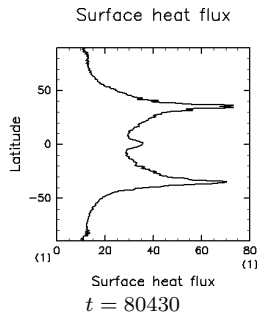
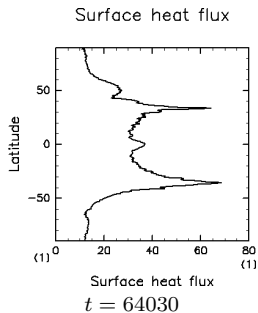
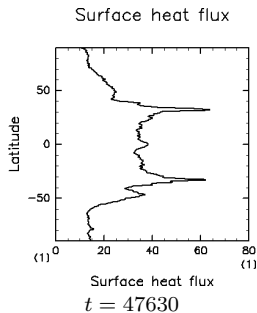
ポテンシャル渦度と角運動量

- 東西・回転軸方向平均ポテンシャル渦度(上)と角運動量(下), 南半球



外側境界熱フラックス

● 東西平均外側境界熱フラックス



まとめ

- 木星・土星の縞状構造を説明できる決定的な流体モデルはまだない
 - これまでの計算結果は時間積分が足りていなかった。
過渡的状态での縞状構造
 - 長時間積分すると縞状構造が消える。
- なぜ縞状構造が消えていくのか？
 - 浅いモデル (順圧) : まだ良く分かっていない
 - 深いモデル : ロスビー波による加速?
- 縞状構造を説明できる新たなモデルの提案が必要

謝辞

回転球殻対流計算は海洋研究開発機構の地球シミュレータを使用しました。

参考文献

- Busse, F. H., 1970 : Thermal instabilities in rapidly rotating systems. J. Fluid Mech., 44, 441–460.
- Busse, F. H., 1976 : A simple model of convection in the Jovian atmosphere. Icarus, 29, 255–260.
- Busse, F. H., 1983 : A model of mean zonal flows in the major planets. Geophys. Astrophys. Fluid Dyn., 23, 153–174.
- Busse, F. H., 2002 : Convective flows in rapidly rotating spheres and their dynamo action. Phys. Fluids, 14, 1301–1314.
- Christensen, U.R., 2002 : Zonal flow driven by strongly supercritical convection in rotating spherical shells. J. Fluid Mech., 470, 115–133.
- Heimpel, M., Aurnou, J., 2007 : Turbulent convection in rapidly rotating spherical shells: A model for equatorial and high latitude jets on Jupiter and Saturn. Icarus, 187, 540–557.
- Obuse, K., Takehiro, S., Yamada, M., 2010 : Long-time asymptotic states of forced two-dimensional barotropic incompressible flows on a rotating sphere. Phys. Fluids, 22, 056601.
- Sukoriansky, S., Galperin, B., Dikovskaya, N., 2002 : Universal spectrum of two-dimensional turbulence on a rotating sphere and some basic features of atmospheric circulation on giant planets. Phys. Rev. Lett., 89, 124501–1–4.
- Sun, Z.-P., Schubert, G., 1995 : Numerical simulations of thermal convection in a rotating spherical fluid shell at high Taylor and Rayleigh numbers. Phys. Fluids, 7, 2686–2699.